

奈々子

伊藤左千夫

青空文庫

その日の朝であった、自分は少し常より寝過ごして目を覚ますと、子供たちの寢床は皆からになつていた。自分が嗽うがいに立つて台所へ出た時、奈々子は姉ななこなるものの大人下駄おとなげたをはいて、外へ出ようとするとそこであつた。焜こんろの火に煙草をすつていて、自分と等しく奈々子の後ろ姿を見送つた妻は、

「奈々ちゃんはね、あなた、きのうから覚えてわたい、わたいつていいですよ」

「そうか、うむ」

答えた自分も妻も同じように、愛の笑いがおのずから顔に動いた。

出口の腰障こししょうじ子につかまつて、敷居しきいを足越あごそうとした奈々子も、ふり返りさまに両親を見てにつこり笑つた。自分はそのまま外へ出る。物置の前では十五になる梅子うめこが、今とりば鶏箱こから雛ひなを出して追い込みに入れている。雪子ゆきこもお兄こもいかにもおもしろそうに笑いながら雛を見ている。

奈々子もそれを見に降りてきたのだ。

井戸ばたの流し場に手水ちようすずをすました自分も、鶏きよに興きようがる子どもたちの声に引かされて、覚えぬ彼らの後ろに立つた。先に父を見つけたお兄は、

「おんちゃんにおんぼしんだ、おんちゃんにおんぼしんだ」

と叫んで父の膝に取りついた。奈々子もあとから、

「わたえもおんも、わたえもおんも」

と同じく父に取りつくのであった。自分はいつものごとくに、おんぼという姉とおんもという妹とをいっしょに背負うて、しばらく彼らを笑わせた。梅子が餌を持ち出してきて鶏にやるので再び四人の子どもは追い込みの前に立った。お児が、

「おんちゃんおやとり、おんちゃんおやとり」

というから、お児ちゃん、おやとりがどうしたかと聞くと、お児ちゃんはおやとりつち言葉をこのごろ覚えたからそういうのだと梅子が答える。奈々子は大きい下駄に疲れたらしく、

「お児ちゃんのかんこ、お児ちゃんのかんこ」

といい出した。お児の下駄を借りたいというのである。父は幼き姉をすかしてその下駄を貸さした。お児は一つ上の姉でも姉は姉らしいところがある。小さな姉妹は下駄を取り替える。奈々子は満足の色を笑いにたたわして、雪子とお児の間にはさまりつつ雛ひなを見る。つづつかすり緋の単ひとえもの物に桃色のへこ帯を後ろにたれ、小さな膝を折ってその両膝に罪のな

い手を乗せてしゃがんでいる。雪子もお児もながら、いちばん小さい奈々子のふうがことに親の目を引くのである。虱しらみがわいたとかで、つむりをくりくりとバリカンで刈つてしもうた頭つきが、いたずらそうに見えていつそう親の目にかわゆい。妻も台所から顔を出して、

「三人がよくならんでしゃがんでること、奈々ちゃんや、鶏がおもしろいかい、奈々ちゃんや」

三児さんじはいちように振り返つて母と笑いあうのである。自分は胸どうきに動悸するまで、この光景に深く感を引いた。

この日は自分は一日家におつた。三児は遊びに飽きると時々自分の書しょけん見の室に襲うてくる。

三人が菓子をもらいに来る、お児がいちばん無遠慮にやつてくる。

「おんちゃん、おんちゃん、かちあるかい、かち、奈なこ子ちゃんがかちだつて」
 続いて奈々子が走り込む。

「おつちゃんあつこ、おつちゃんあつこ、はんぶんはんぶん」

といいつついきなり父に取りつく。奈々子が菓子ほしい時に、父は必ずだっこしろ、だ

つこすれば菓子やるというために、菓子のほしい時彼はあつこあつこと叫んで父の膝に乗るのである。一つではあまり大きいというので、半分ずつだよといいい聞かせられるために、自分からはんぶんはんぶんというのである。四歳のお児はがっこいい、三歳の奈々子はあつこという。年の違いもあれど、いくらか性質の差もわかるのである。六歳の雪子はふたりのあとからはいつてきて、ただしれしれと笑っている。菓子が三人に分配される、とすぐに去つてしまふ、風の凪ないだようにあとは静かになる。静かさが少しく長くなると、どうして遊んでるかなと思う。そう思つて庭を見ると、いつの間にか三人は庭の空地に来ておつた。くりくり頭に桃色のへこ帯がひとり、角子みずら頭に卵色のへこ帯がふたり、何がおもしろいか笑いもせず声も立てず、何かを摘んでるようすだ。自分はただかぶりの動くのとへこ帯のふらふらするのをしばらく見つめておつた。自分も声を掛けなかつた、三人も菓子とも思わなかつたか、やがてばたばた足音がするから顔を出してみると、奈々子があつた。三人が手を振つてかける後ろ姿が目にとまつた。

ご飯ができたからおんちゃんを呼んでおいでと彼らの母がいうらしかつた。奈々ちゃんお先においでよ奈々ちゃんと言つて雪子が叫ぶ。幼きふたりの伝令使は見る間に飛び込んできた。ふたりは同様に父の背に取りつく。

「おんちゃんごはんおあがんさいって」

「おはんないははははは」

父は両手を回し、大きな背にまたふたりをおんぶして立った。出口がせまいので少しからだを横にようやく通る窮屈さをいつそう興がって、ふたりは笑い叫ぶ。父の背を降りないうちから、ふたりでおんちゃんを呼んできた母にいう騒ぎ、母はなお立ち働いてる。父と三児は向かい合わせに食卓についた。お児は四つでも箸持はしつことは、まだほんとうでない。少し見ないと左手に箸を持つ。またお箸の手が違ったよといえ、すぐ右に直すけれど、少しするとまた左に持つ。しばしば注意して右に持たせるくらいであるから、飯も盛んにこぼす。奈々子は一年十か月なれど、箸持つ手は始めから正しい。食べ物に着物をよごすことも少ないのである。姉たちがすわるにせまいといえ、身を片寄せてゆずる、彼の母は彼を熟視して、奈々ちゃんは顔構つらえからしっかりしていますねいという。

末子であるから埒らちもなくかわいというわけではないのだ。この子だと思うのは彼の母ばかりではなく、父の目にもそう見えた。

午後は奈々子が一昼寝してからであった、雪子もお児もぶらんこに飽き、寝覚ねざめた奈々子連れて、表のほうにいるようすであったが、格子戸をからりあけてかけ上がりざまに

三児はわれ勝ちと父に何か告げんとするのである。

「お父さん金魚が死んだよ、水鉢の金魚が」

「おんちゃん金魚がへんだ。金魚がへんだよおんちゃん」

「へんだ、おつちゃんへんだ」

奈々子は父の手を取ってしきりに来て見よとの意を示すのである。父はただ気が弱い。口で求めず手で引き立てる奈々子の要求に少しもさからうことはできない。父は引かるるままに三児のあとから表にある水鉢の金魚を見にいった。五、六匹死んだ金魚は外に取り捨てられ、残った金魚はなまこの水鉢の中にくるくる輪をかいてまわっていた。水は青黒く濁^{にご}つてる。自分はさつそく新しい水をバケツに二はいくみ入れてやった。奈々子は水鉢の縁に小さな手を掛け、

「きんご、おつちゃんきんご、おつちゃんきんご」

「もう金魚へにやしないねい。ねいおんちゃん、へにやしないねい」

三児は一時金魚の死んだのに驚いたらしかつた。父はさらに金魚を買い足してやることを約束して座に返つた。三人はなおしきりに金魚をながめて年相当な会話をやってるらしい。

あとから考えたこの時の状態を何といったらよいか。無邪気な可憐な、ほとんど神に等しき幼きものの上に悲惨なる運命はすでに近く迫りつつありしことを、どうして知り得られよう。

くりくりと毛を刈ったつむり、つやつやと肥ったその手や足や、なでてさすって、はてはねぶりまわしても飽きたらぬ悲しい奈々子の姿は、それきり父の目を離れてしまった。おんもといい、あつこといい、おつちゃんといったその悲しい声は永遠に父の耳を離れてしまった。

この日の薄暮はくぼごろに奈々子の身には不測ふそくの禍わざわいがあった。そうして父は奈々子がこの世を去る数時間以前奈々子に別れてしまった。しかも奈々子も父も家において……。いつもならば、家におればわずかの間見えなくとも、必ず子どもはどうしたと尋ねるのが常であるのに、その日の午後は、どういふものか数時間の間子どもをたずねなかつた。あとから思うと闇の夜に顔も見得ず別れてしまったような気がしてならない。

一つの乳牛に消化不良のがあつて、今井いまい獣医の来たのは井戸ばたに夕日の影の薄いこ

ろであつた。自分は今井とともに牛を見て、牧夫に投薬の方法など示した後、今井獣医が何か見せたい物があるからといわるるままに、今井の宅にうち連れてゆくことにした。自分が牛舎の流しを出て台所へあがり奥へ通つたうちに梅子とお手伝いは夕食のしたくにせわしく、雪子もお兎もうろうろ遊んでいた、民子たみこも秋子あきこもぶらんこに遊んでいた。ただ奈々子の姿が見えなかつた。それでも自分はあえて怪しみもせず、今井とともに門を出た。今井の宅は十二、三分間でゆかれる所である。

今井の宅には洋燈ランペンもついてほかに知しりびと人もひとりおつた。上がつてからおよそ十五、六分も過ぎたと思う時分に、あわただしき迎えのものは、長女とお手伝いであつた。

「お父さん大へんです、奈々ちゃんが池へ落ちて……」

それやつと口から出たか出ないかも覚えがなく、人を押しのけて飛び出した。飛び出る間際にも、

「奈々子は泣いたかつ」

と問うたら、長女の声でまだ泣かないと聞こえた。自分はその不安な一語を耳にはさんで、走りに走つた。走れば十分とはかからぬ間なれど肥つた自分には息切れがしてほんどのめりそうである。ようやく家近く来ると梅子が走ってきた。自分はまた、

「奈々子は泣いたか」

「まだ泣かない、お父さんまだ医者も来ない」

自分はおわてながらもむつかしいなと腹に思いつつなお一息と走った。

わやわやと騒がしい家の中は薄暗い。妻は台所の土間に藁火を焚いて、裸体の死児をあたたためようとしている。入口には二、三人近所の人もいたようなれどだれだかわからぬ。

民子、秋子、雪子らの泣き声は耳にはいった。妻は自分を見るや泣き声を絞って、何だつてもう浮いていたんですものどうしてえいやらわからないけれど、隣の人が藁火であたためなければつていうもんですから、これで生き返るでしょうか……。自分はすぐに奈々子を引き取った。引き取りながらも、医者は何とといった。坂部はいたかといえ、坂部は家にいてすぐくるといいましたと返事したのはだれだかわからなかった。

水にぬれた紙のごとく、とんと手ごたえがなく、頸も手も腰にも足にも、いささかだも力というものはない。父は冷えたわが子を素肌すはだに押し当て、聞き覚えのおぼつかなき人工呼吸を必死と試みた。少しもしるしはない。見込みのあるものやら無いものやら、ただわくわくするのみである。こういううち、医者はどうして来ないかと叫ぶ。あおむけに寝かして心臓音を聞いてみた。素人しろうとながらも、何ら生せいある音を聞き得ない。水を吐はいたかと

聞けば、吐かないという。しかし腹に水のあるようすもない。どうする詮せんも知らずに着物をあたたためてはあてがい、あたたためてはあてがってるのみ、家じゆう皆立って手にするところがなくうろうろしてる。妻は叫ぶ、坂部さんがいなければ木きの下したさんへゆけてこかぬい。坂部さんはどうしたんだろうねい。坂部さんへまた見にゆきましたというものがあつた。妻は上げた時すぐに奈あちゃんやつて呼んだら、どうも返事をしたようであつたがねい。返事ではなかつたのかしら……。なんだつて浮いていたのを見つけたんだもの、よもや池とは思わないから、いちばんあとで池を見たら浮いていたんですもの、という。

それでも息を吹き返すこともやと思ひながら、浮いておつたということは、落ちてから時間のあることを意味するから、妻はしばしばそれを気にする。

「坂部さんが、坂部さんが」

という声は、家じゆうに息を殺させた。それで医者ならば生き返らせることができるかとの一縷いちるの望みをかけて、いつせいに医者に思いをあつめた。自分はその時まで、肌いに抱き締めあたためていた子どもを、始めて蒲団の上へはなした。冷然たる医者は一いち、二語にご簡単な挨拶をしながら診察にかかつた。しかし診察は無造作であつた。聴診器を三、四か所胸にあてがつてみた後、瞳を見、眼瞼まぶたを見、それから形ばかりに人工呼吸を試み注射を

した。肛門を見て、死後三十分くらいを経過しているという。この一語は診察の終わりであった。多くの姉妹らはいまさらのごとく声を立てて泣く、母は顔を死児に押し当ててうつぶしてしまった。池があぶないあぶないと思つていながら、何という不注意なことをしたんだらう。自分もいまさらのごとくわが不注意であつたことが悔いられる。医師はそのうち帰つてしまわれた。

近所の人々が来てくれる。親類の者も寄つてくる。来る人ごとに同じように顛末てんまつを問われる。妻は人のたずねに答えないのも苦しく、答えるのはなおさら苦しい。もちろん問う人も義理で問うのであるから深くは問いもせぬけれど、妻はたまらなくなつて、

「今夜わたしはあなたとふたりきりでこの子の番をしたい」

といいだす。自分はそうもいくまいがとにかくここへは置けない。奥へ床を移さねばならぬといつて、奥の床の前へ席を替えさせた。枕まくらがみ上きようづくえに経机きようづくえを据え、線香を立てた。奈々子は死に顔美しく真に眠つてるようである。線香を立てて死人扱いをするのがかあいそうでならないけれど、線香を立てないのも無情のように思われて、線香は立てた。それでも燈とうみょう明みょうを上げたらという親戚の助言は聞かなかつた。まだこの世の人でないとはどうしても思われぬから、燈明とうみょうを上げるだけは今夜の十二時過ぎからにしてといつた。

親戚の妻さいしよ女によだれかれも通夜つやに来てくれた。平生へいぜい愛想笑あいせういをする癖くせが、悔くやみ言葉の間にま出るのをしいてかみ殺ころすのが苦くるしそうであつた。近所きんじよの者のこの際の無駄話むだわは実まにいやであつた。寄よつてくれた人たちは当然たうぜんのこととして、診断書しん断書のこと、死亡届しやうじふのこと、埋葬まいざうのこと、寺てらのことなど忠実ちゆうじつに話わしてくれる。自分はしようことなしに、よろしく頼たのむといつてはいるものの、ただ見る眠ねつてるように、花はなのごとく美しく寝ねているこの子の前で、葬式そうしきの話わをするのは情なさけけなくてたまらなかつた。投げ出なしてゐるわが子の足あしに自分の手を添そえその足をわが顔かほへひしと押し当あつて横顔よこかほに伏ふしている妻つまは、埋葬まいざうの話わを聞きいてるか聞きいていないか、ただ悲かなしげに力ちからなげに、身みをわが子の床とこに横よこたえている。手にするこゝとがなくなつて、父ちちも母ははも心の思おもいはいよいよ乱みだれるのである。

わが子の寝顔ねかほにつくづく見みいつていると、自分はどうしてもこの子が呼吸こほしてゐるようように思おもわれてならない。胸むねに覆おうてある單物ひとえもののある点ちがいくらか動ういておつて、それが呼吸こほのために動くように思おもわれてならぬ。親戚しんせきの妻女さいによが二つになる子どもをつれてきて、そこに寝ねせてあればその子の呼吸こほの音がどうかするとわが子のそれのように聞きこえる。自分自分は、たえられなくなつて、覆おいの着物きものをのけ、再びわが子の胸むねに耳みみをひつつけて心臓音しんざうおんを聞きいてみた。

何ほど念を入れて聞いても、絶対の静かさは、とうてい永久の眠りである。再び動くということなき永久の静かさは、実に冷酷のきわみである。

永久なる眠りも冷酷なる静かさも、なおこのままわが目にとどめ置くことができるならば、千重ちえの嘆なげきに幾分の慰藉いしやはあるわけなれど、残酷にして浅薄な人間は、それらの希望に何の工夫を費さない。

どんなに深く愛する人でも、どんなに重く敬する人でも、一度心臓音の停止を聞くや、なお幾時間もたたないうちから、埋葬の協議にかかる。自分より遠ざけて、自分の目より離さんと工夫するのが人間の心である。哲学がそれを謳歌おうかし、宗教がそれを賛美し、人間のことはそれで遺憾いかんのないように説いている。

自分は今つくづくとわが子の死に顔を眺め、そうして三日の後この子がどうなるかと思つて、真にわが心の薄弱が情けなくなつた。わが生活の虚偽きよぎ残酷ざんこくにあきれてしまった。近隣親族の徒が、この美しい寝顔の前で埋葬を議することを、痛く不快に感じた。自分もつまりはそれに従うのほかないのであつてみれば、自分もやはり世間一流の人間に相違ないのだ。自分はこう考えて、浮かぶことのできない、とうてい出ずることのできない、深い悲しみの淵ふちに沈んだような気がした。今の自分はただただ自分を悔い、自分を痛め、自

分を損じ苦しめるのが、いくらか自分を慰めるのである。今の自分には、哲学や宗教やはこのごとく余裕のある人どもの慰み物としか思えない。自分もいままではどうかすると、哲学とか宗教とかいつて、自分を欺き人を欺いたことが、しみじみ恥ずかしくてならなくなつた。

真に愛するものを持たぬ人や、真に愛するものを死なしたことの無い人に、どうして今の自分の悲痛がわかるものか、哲学も宗教も今の自分に何の慰藉をも与え得ないのは、とうていそれが第三者の言であるからであるまいか。

自分はもう泣くよりほかはない。自分の不注意を悔いて、自分の力なきをなげいて泣くよりほかはない。美しい死に顔も明日までは頼まれぬ。わが子を見守つて泣くよりほかに術すべはない。

妻もただ泣いたばかりで飽き足らなくなつたか、部屋に帰つて亡き人の姉々らと過ぎし記憶をたどつて、悔しき当時の顛てんまつ末を語り合つてゐる。自分も思わず出てきてその仲間になつた。

自分が今井とともに家を出てから間もないことであつた。妻は気分が悪く休みおつたが、子どもたちの姿がしばらく目を離れたので、台所に働きおる姉たちに、子どもたちはどう

していると問うた。姉はよどみなく、三人がいつしよにおもしろそうに遊んでいますとの答えに、妻は安心して休みおった。それから少し過ぎてお児がひとり上がってきて、母ちやん乳ちちいというのに、また奈々子とは姉らに問えば、そこらに遊んでいるでしょう、秋ちやんが遊びにつれていったんでしようなどいうをとがめて、それではならない、たしかに見とどけなくてはなりませんと、妻は今は起き出でて、そこかここかとたずねさした。

隣へ見にやる、菓子屋へ見にやる、下水溝げすいみぞの橋の下まで見たが、まさか池とは思わないので、最後に池を見たらば……。

浮いておった。池に仰向けになつて浮いていた。垣根の竹につかまって、池へはいらずに上げることができた。時間を考えると、初めいるかと問うた時たしかにいたものならば、その後の間はまことにわずかの間に相違ないが、まさか池にと思つて早く池を見なかつた。騒ぎだした時、すぐに池を見たら間に合つたかもしれない。そういう生まれ合わせだと皆はいうけれど、そうばかりは思われない。あぶないといつていながら、なぜ早く池を埋めてしまわなかつたか。考えると何もかも届かないことばかりで、それが残念でならない。

妻の繰り言は果てしが無い。自分もなぜ早く池を埋めなかつたか、取り返しのかかぬあ

やまちであった。その悔恨はひしひし胸にこたえて、深いため息をするほかはない。

「ねいあなた、わたしがいちばん後に見た時にはだれかの大人おとな下駄をはいていた。あの子は容易に素足にならなかつたから下駄をはいて池へはいったかどうか、池のどのへんからはいったか、下駄などが池に浮いてでもいるか、あなたちよつと池を見て下さい」

妻のいうままに自分は提ちようちん灯を照らして池を見た。池には竹垣をめぐらしてある。東の方の入口に木戸を作つてあるのが、いつかこわれてあけ放しになつてゐる。ここからはいつたものに違いない。せめてこの木戸でもあつたらと切ない思いが胸にこみあげる。連日の雨で薄濁りの水は地平線に平行している。ただ静かに滑らかで、人ひとり殺した恐ろしい水とも見えない。幼い彼は命取らるる水とも知らず、地平と等しい水ゆえ深いとも知らずに、はいる瞬間までも笑ましき顔、愛くるしい眼まなこに、疑いも恐れもなかつたろう。自分にはありありと亡き人の倂おもかけが目に浮かぶ。

梅子も出てきた、民子も出てきた。二坪にも足らない小池のまわり、七度も八度も提灯を照らし回つて、くまなく見回したけれども、下駄も浮いていず、そのほか亡き人の物らしいもの何一つ見当たらない。ここに浮いていたというあたりは、水草の藻もが少しく乱れているばかり、ただ一つ動かぬ静かな濁水を提灯の明りに見れば、ただ曇つて鈍い水の光

り、何の罪を犯した色とも思えない。ここからと思われたあたりに、足跡でもあるかと思いたが下駄の跡も素足の跡も見当たらない。下駄のないところを見ると素足で来たに違いない。どうして素足でここへ来たか、平生用心深い子で、縁側から一度も落ちたことも無かつたのだから、池の水が少し下がって低かつたら、落ち込むようなことも無かつたらうにと悔やまれる。梅子も民子もただ見回してはすすり泣きする。沈黙した三人はしばらく恨めしき池を見やつて立つてた。空は曇つて風も無い。奥の間でお通夜してくれる人たちの話し声が細々と漏れる。

「いつまで見ていても同じだから、もう上がろうよ」

といつて先に立つと、提灯を動かした拍子に軒下にある物を認めた。自分はすぐそれと気づいて見ると、果たして亡き人の着ていた着物であつた。ぐつしやり一まとめに土塊つちくれのように置いてあつた。

「これが奈々ちゃんななちゃんの着物だね」

「あア」

ふたりは力ない声で答えた。緋かすりの単物に、メリンスの赤あかじま縞あかじまの西洋前掛けである。自分
はこれを見て、また強く亡き人の倅おもかけを思い出さずにいられなかつた。

くりくりとしたつむり、赤い縞の西洋前掛けを掛け、仰向いて池に浮いていたか。それを見つけた彼の母の、その驚き、そのうろたえ、悲しい声を絞しぼって人を呼びながら引き上げたありさま、多くの姉妹らが泣き叫んで走り回ったさまが、まざまざと目に見るように思ひ出される。

三人が上がってきて、また一しきり、親子姉妹がいつてかないはかな言を繰り返した。十二時が過ぎたというので、経机に燈明を上げた。線香も盛んにももされる。自分はまだどうしてこの世の人でないとは思われない。幾度見ても寝顔は穏やかに静かで、死という色ざしは少しもない。妻は相変わらず亡き人の足のあたりへ顔を添えてうつぶしている。そうしてまたしばしば起きてはわが子の顔を見まもるのであった。お通夜の人々は自分の仕振りに困こまり果ててか、慰めの言葉もいわず、いささか離れた話を話し合ってる。夜は二時となり、三時となり、静かな空気はすべてを支配した。自分はその間にひとり抜け出では、二度も三度も池のまわりを見に行つた。池の端に立つては、亡き人の今朝からの倅を繰り返し繰り返し思い浮かべて泣いた。

おっちゃんにあつこ、おっちゃんにおんも、おっちゃんがえい、お見ちゃんのかんこ、お見ちゃんのかんこがえいと声がするかと思うほどに耳にある彼かの子この言葉を、口にい

さえすればすぐ涙は流れる。何べんも何べんもそれを繰り返しては涙を絞った。

夜が明けそうと気づいて、驚いてまた枕まくら辺にかえた。妻もうとうとしてるようであった。ほかの七、八人ひとりも起きてるものは無かった。ただ燈とうみ明の火と、線香の煙とが、深い眠りの中の動きであった。自分はこの静けさに少し気持ちがよかった。自分の好きなことをするに気がねがいらなくなつたように思われたらしい。それで別にどういうことをするという考えがあるのでもなかつた。

夜が明けたらこの子はどうなるかと、恐る恐る考えた。それと等しく自分の心持ちもどうなるかと考えられる。そしてそういうことを考えるのを、非常に気味わるく恐ろしく感じた。自分は思わず口のうちに念仏を始めた。そうして数十べん唱えた。しかしいくら念仏を唱えても、今の自分の心の痛みが少しも軽くなると思えなかつた。ただ自分は非常に疲れを覚えた。気の張りが全く衰えてどうなつてもしかたがないというような心持ちになつてしまつた。

(明治四十二年九月)

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」集英社文庫、集英社

1977（昭和52）年9月20日第1刷発行

1981（昭和56）年6月15日第4刷発行

入力：大野晋

校正：大西敦子

2000年6月2日公開

2005年11月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奈々子
伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>